

防衛庁副長官挨拶

ただ今、御紹介に預かりました防衛庁副長官の赤城徳彦でございます。このたび、防衛研究所創立 50 周年という記念すべき年に、平成 14 年度安全保障国際シンポジウムが開催されるに当たり、御参加を賜ったフィデル・ヴァルデス・ラモス フィリピン共和国元大統領をはじめ各国の研究者の皆様、そして御来場の皆様に歓迎の言葉を述べる機会を得ましたことを大変嬉しく思っております。

最近の国際情勢を見ますと、世界的規模の武力紛争が生起する可能性は低下しましたが、複雑で多様な地域紛争が多発し、また、大量破壊兵器やミサイルなどの移転・拡散が強く懸念されております。さらに、こうした兵器が国家だけでなくテロリストなど非国家集団に拡散する危険についても懸念されております。

他方、国家間の相互依存の拡大、深化などを背景として、こうした問題に対する国際協力の枠組みが拡がりつつあります。2001 年 9 月 11 日に米国において発生した同時多発テロに対し国際社会が取り組んでいる闘いは、まさにその証左であります。

このような国際社会の取り組みに対して、我が国においても、テロは国家にとって新たな脅威であり、自らの安全保障、安全確保にも関わる事態であるとの認識のもと、テロ対策特措法に基づき自衛隊の艦船や航空機による米軍等への協力支援活動などを行っているところです。

また、自衛隊における国際平和協力業務については、1992 年に国際平和協力が成立し、部隊などの派遣を行い、着実に実績と経験を積み上げてきました。我が国が国連を中心とした国際平和のための努力に積極的に貢献することについては、内外の期待が高まっており、これを受け、2002 年 12 月には PKF 本体業務の凍結解除などを内容とした国際平和協力の改正がなされるとともに、2002 年 3 月には、過去最大規模となる施設部隊が東ティモールに派遣されました。

このような背景のもと、このたび防衛研究所が主催する安全保障国際シンポジウムにおいて、「軍事力の非伝統的役割と東アジアの安全保障」をテーマとする議論が行われることは、21 世紀を迎えた我が国の安全保障を考える上で極めて意義深いことだと思っております。本日から明日にかけてのシンポジウムには、ラモス フィリピン共和国元大統領をはじめ、国内外の著名な先生方が参加され、忌憚のない意見交換が行われる

ことと存じます。われわれ防衛・安全保障に携わる者としても、固定観念にとらわれない自由な議論の中から、21世紀の軍事力の新たな役割に関する創造的なアイデアが出るのではないかと、大きな期待を寄せております。

そして、本シンポジウムを通じ、実りある安全保障論議を進めるための議論の材料が提供され、21世紀の東アジア地域の安全保障問題に対する私たちの認識が深まり、我が国も含めた世界の安全保障に関する議論がいつそう豊かなものになっていくことを期待してやみません。

最後に、遠路はるばるお見えになられた各国の先生方、そして御来場の皆様に重ねて御礼を申し上げますとともに、本シンポジウムの成功を心から祈って、私の挨拶とさせていただきます。

平成 15 年 1 月 21 日

防衛庁副長官

赤城徳彦